

琉球大学学術リポジトリ

小学校社会科教科書と沖縄県小学校社会科副読本に みる日本人移民および日系人の記述の検討

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2017-09-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 花木, 宏直, Hanaki, Hironao メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/37254

小学校社会科教科書と沖縄県小学校社会科副読本 にみる日本人移民および日系人の記述の検討

花木宏直[※]

The Study of the Description about Japanese Immigrants in the Textbook and the Supplementary Reader of Elementary School Social Studies in Okinawa Prefecture

Hironao HANAKI

I. 問題意識

平成20(2008)年の小学校学習指導要領の改訂において、社会科では地域社会や国土に対する理解のさらなる促進や、問題解決学習の充実により国際社会で主体的に生きる能力の育成が求められている¹⁾。本稿で注目する日本人移民および日系人は、上記の目標を達成する上で有効な題材の1つである。とくに、小学校第6学年における日本史や国際理解の学習においては、近代日本から海外へ日本人移民の送出や、現代の海外における日系人の活動、海外から日本への日系人をはじめ外国人労働者の受入れといった、さまざまな事象が活用できる。また、小学校第3学年と第4学年の地域学習においても、たとえば沖縄県では、地域の特色の1つに近代以降多数の海外移民を送出したことが挙げられ、現代でも世界のウチナーンチュ大会に代表されるように沖縄県系人と密接な関わりを維持する等、教材としての利用価値は高い。

しかし、小学校社会科教科書において、日本人移民や日系人の記述は少ない²⁾。小学校における日本人移民や日系人を題材とした授業開発についても、盆ダンスをはじめ日本文化の海外での変容に注目したものや³⁾、日系人のライフストーリーの活用による日本人移民や日系人の存在へより実感をもち興味関心の育成⁴⁾、日本人移民や日系人の動向

を総観することで多文化共生の意識の育成を重視したもの等がみられるが⁵⁾、やはり少ない。小学校社会科副読本にも注目すると、日本人移民や日系人の記述は、沖縄県からの海外移民送出の先覚者である当山久三や大城孝蔵の出身地である金武町等を除き、沖縄県の市町村を含め全国的にはほぼ皆無である⁶⁾。また、沖縄県で刊行された小学校第3学年と第4学年以外の副読本についても、中城村の中学校社会科副読本で海外移民送出の地理的背景について記される以外、取り扱いはほとんどみられない⁷⁾。小学校社会科教科書だけでなく、中学校社会科地理教科書にも注目すると、小学校社会科教科書に比べブラジルの日系人や日本の日系人労働者の記述は詳しいが、沖縄県と関連づけた授業開発には課題が多い⁸⁾。このように、日本人移民や日系人は、小学校にとどまらず初等・中等教育における社会科の題材として有効でありながら、沖縄県を含め全国的に十分活用されていない。

以上の点を踏まえ、本稿では、学習者として沖縄県の小学生を想定する。その上で、本稿は、小学校社会科教科書と沖縄県小学校社会科副読本における日本人移民や日系人の記述を検討し、今後の沖縄県の小学校社会科において日本人移民や日系人を題材として活用しうるための論点を整理することを目的とする。

[※] 社会科教育専修・講師

表1 小学校社会科教科書にみる日本人移民や日系人の記載箇所

出版社/項目	6上		6下	
	我が国の歴史上の 主な事象	我が国とつながりの深い国の 人々の生活の様子		国際社会における 我が国の役割
		近代	アメリカ合衆国	ブラジル
教育出版	○	×	○	○
日本文教出版	×	×	○	×
東京書籍	×	△	○	△

注) 項目は学習指導要領の表現を用いた。「○」は本文中に記載有,「△」は図表のみ記載,「×」は記載なしを示す。

資料:各教科書をもとに作成。

II. 小学校社会科教科書にみる日本人移民や日系人の記述

(1) 記載箇所

沖縄県における小学校社会科教科書は、八重山地区(石垣市)と私立海星小学校(石垣市)で日本文教出版、私立沖縄カトリック小学校(宜野湾市)で東京書籍となっている以外は、全ての国立および私立の小学校で教育出版を採用している。また、日本人移民や日系人の記述は、小学校第6学年の「我が国の歴史上の主な事象」や「我が国とつながりの深い国の人々の生活の様子、国際社会における我が国の役割」に関する内容に主に登場する⁹⁾。そこで、本章では、小学校社会科教科書のうち、上記3社の刊行した、平成22(2010)年に改訂された現行の第6学年の教科書に注目し検討する¹⁰⁾。

はじめに、日本人移民や日系人の記載箇所に注目したい。表1より、3社とも第6学年下の教科書の、「我が国とつながりの深い国の人々の生活の様子」に関する内容のうち、ブラジルを扱った箇所記載がみられた。また、教育出版では「100年前からつながっている日本とブラジル」、日本文教出版では「日本とのつながり」というみだしが立てられ、日系人の動向が概観されていた。ただし、東京書籍については、「調べたことをまとめようブラジル新聞」というみだしにて、ブラジルの地誌学習というより、フィールドワークの方法論を学習するための事例としてブラジルを扱うという志向で扱われていた。ブラジル以外の地域につい

ては、東京書籍でアメリカ合衆国に記載がみられたが、ロサンゼルスのリトルトーキョーの写真が1つ提示されるのみであった。

また、「国際社会における我が国の役割」の内容のうち、これからの世界と日本との関係を扱った箇所について、教育出版では、「多文化共生社会をめざして」のうち「理解し支え合う関係をつくる小牧市」というみだしで、日系人児童への多文化教育の実践が紹介されていた。一方、東京書籍では、在日外国人の人数に関する棒グラフが提示され、「日本の各地に、大勢の外国人が働きに来ています。日本の学校にも外国の子どもたちが通い、日本人といっしょに学んでいます」という解説がみられた。

さらに、日本人移民は主に近代に送出されたため、第6学年上の教科書の、「我が国の歴史上の主な事象」の内容のうち近代の箇所にも注目すると、教育出版では「広げ深める 海外へ移住した日本人」に「海をわたった日本の文化～ハワイへ移住した人々」と「100年にわたる交流の始まり～ブラジルへ移住した人々」というみだしが立てられ、ハワイとブラジル移民に言及されていた。一方、日本文教出版と東京書籍については、この箇所での記載はみられなかった。

(2) 記述内容—ブラジルの場合—

次に、日本人移民や日系人の記述内容に注目したい。まず、3社とも記載のみられたブラジルの箇所について、記述を比較する。

教育出版では、ブラジルを概観した箇所の末尾

に、「ブラジルには、明治時代以降、たくさんの日本人が仕事を求めて移り住みました。現在では、その人の子孫である日系の人々が、約150万人暮らしています」と記されていた。その上で、「100年前からつながっている日本とブラジル」というコラムが設けられ、以下の記述がみられた。

1908（明治41）年、日本からの最初の移民船がブラジルに着いてから、100年以上が過ぎた。日本から移り住んだ人々は、遠くはなれたブラジルで、地元の人々と力を合わせて生活を切り開いてきた。サンパウロには、ブラジルの中でも最も多くの日系の人々が住んでいる。日本語の新聞も発行されている。また、ブラジルからは、たくさんの日系の人々が日本に働きに来ている。

また、コラムには、「日本からの移住100周年を記念して行われた式典（2008年）」の写真が記載されていた^{10）}。

日本文教出版では、「日本とのつながり」というみだしにて、以下の記述がみられた。

1908年（明治41年）以降、約25万人の日本人が、仕事を求めてブラジルに移住し、コーヒー農園や工場で働きました。現在ブラジルには、約140万人の日系ブラジル人がいて、東洋人街もできています。東洋人街には、100円ショップや、日本語で歌えるカラオケ店などもあります。日本に働きに来る日系ブラジル人も多く、日本に住む約32万人のブラジル人の大部分が日系ブラジル人です。日本人がブラジルに移住して100周年となる2008年には、「日本ブラジル交流年」として、日本やブラジルの各地でさまざまな交流事業がおこなわれました。

また、上記内容の要点をまとめた「日本とブラジルとの関係」の年表や、「サンパウロにある東洋人街」と「日本ブラジル交流年の記念行事をおこなう小学生たち（愛知県東浦町）」の写真も記載されていた。さらに、ブラジルの学校生活を紹介する内容では、日系ブラジル人男性の談話という設定で記されていた。ブラジルの内容の末尾に、

学習者のまとめの事例として、「今まで、ブラジルといえば、サッカーやコーヒーなどが頭にうかびました。でも、日本からブラジルに移住した日本人のしたことなど、知らなかったことも知ることができました」と記されていた^{12）}。

東京書籍では、1節で指摘したように、ブラジルの地誌学習ではなく、問題解決学習の題材としてのブラジルという志向がみられた。そして、海外移住資料館（神奈川県横浜市）を訪れ、調べ学習の成果を「ブラジル新聞」という作品にまとめていた。作品の中から、日本人移民および日系人を概観した内容を抜粋すると、以下の2か所がみいだされた。

1908年から1941年までに、約19万人もの日本人が移住し、戦後には約7万人が移住しました。現在ブラジルには約140万人の日系人がいます。移住当初は、大地を開かんし、主にコーヒーや綿花のさいばいの仕事で生計を立てたそうです。

お祝いの日の食卓には、ブラジルと日本の食事が並ぶそうです。いなりずしや漬物といっしょに、ブラジル風パーベキューやフェイジョアーダという豆料理が並んでいるのが印象的でした。

また、海外移住資料館の展示品である移民が持参したトランクや日系人の食卓の再現模型、聞き取り調査対象とした日系ブラジル人3世女性の横顔、児童がガイドに案内される様子の、4つの写真がみられた^{13）}。

これらの記述から、3社とも明治41（1908）年にブラジルへの日本人移民がはじまったことや、農業開拓を目的としていたこと等、おおまかな歴史を概観していた。また、教育出版と日本文教出版では、現代における日本への日系人労働者の増加や、平成20年に日本人ブラジル移民100周年記念行事が行われたことにも言及されていた。

一方、相違点として、日系人の表記について、教育出版は「日系の人々」、日本文教出版は「日系ブラジル人」、東京書籍は「日系人」と、微妙な相違がみられた。ブラジルの日系人人口は、教育出版が約150万人に対し、日本文教出版と東京書籍が約140万人となっていた。日系人の主に従事し

た産業についても、教育出版は具体的な職種への言及がなく、日本文教出版はコーヒーの栽培と工場労働者、東京書籍はコーヒーと綿花の栽培となっていた。

さらに、3社とも文化的側面に言及されていたが、教育出版は日本語新聞、日本文教出版はサンパウロにある東洋人街と100円ショップやカラオケ、東京書籍は日本料理とブラジル料理が併存した日本人移民農家の食卓といったように、設定された時代に近現代や現代が混在し、居住区域にも都市と農村の事例がみられた。日系人への聞き取り調査や語りの扱いについて、教育出版では言及がみられず、日本文教出版では日系人の直接の語りという設定でブラジルの生活を説明し、東京書籍では日系人へ聞き取り調査をした上で児童がブラジルの生活を説明するという設定となっていた。日本人ブラジル移民100周年記念行事についても、教育出版ではブラジル側のイベントの写真、日本文教出版では日本側のイベントの写真が提示され、東京書籍では言及されていなかった。

(3) 記述の課題—ブラジル以外への記述にも注目して—

ブラジル以外の箇所での日本人移民や日系人の記載は、とくに教育出版にて、第6学年下の教科書の「国際社会における我が国の役割」の内容のうち、これからの世界と日本との関係を扱った箇所と、第6学年上の教科書の「我が国の歴史上の主な事象」の内容にてみられた。まず、前者については、「理解し支え合う関係をつくる 小牧市」というコラムが設けられ、以下の記述がみられた¹⁴⁾。

愛知県小牧市では、日系ブラジル人を中心に、さまざまな国の人々が働いています。市内にある桃ヶ丘小学校には、4か国の子どもたちが通ってきています。しかし、家族と一緒に来日した子どもたちの中には、日本語が十分理解できない子どももいます。そのため、日本での生活や授業で不便がないように、日本語や勉強を教えるアミーゴ教室が、学校の中にあります。教室では、先生やポルトガル語・スペイン語・タカログ語の語学相談員、地域のボランティアの方たちの力を借りて、日本語やひらがな、漢字・

算数などの勉強をしています。また、自分の国の言葉を忘れないように、自国語の勉強もしています。

学校では、国際理解集会を開いて、さまざまな国の子どもたちが自分の国の文化や学校生活について発表しています。こうした行事を通して、おたがいの文化や考え方のちがいを認め合い、温かい人間関係づくりをめざしています。

この記述には、語学相談員にタカログ語の担当もみられることからフィリピン人等の日系人以外にも含まれると推察されるが、主に日系人労働者の子弟の児童を対象とした補習や学校行事をはじめ小学校における多文化教育の事例が提示されている。ただし、日系人労働者の来日の経緯については、1990年代の日本での労働者不足や中東系等外国人不法労働者の増加、入国管理法による日系人労働者の入国緩和、日系人の多く居住する南米の経済危機等が関わっているが、これらの点について言及されていない¹⁵⁾。また、日系人労働者の子弟の児童をめぐって、日本語能力が十分でない場合が多く学習が遅れが生じやすいことや、その対策として通常の学級に加え補習学級での宿題をこなすため過重な勉強量となること、勉強量を確保したいが親が経済的困窮である場合が少なくないため家庭での学習環境の不備や塾へ通学できないことをはじめ、多文化教育の問題点についてほとんど検討されていない¹⁶⁾。しかし、小学校という学習段階を踏まえると、よりよい多文化教育のあり方について意見形成をめざすというより、学習者の同世代ないし身近な環境にも国際理解に関わる問題があるということを意識づけるという点で、この記述を提示する意義は大きい。

次に、後者については、近代に「広げ深める 海外へ移住した日本人」というみだしが立てられ、「海をわたった日本の文化～ハワイへ移住した人々」と「100年にわたる交流の始まり～ブラジルへ移住した人々」という2つのコラムが設けられていた。さきに、ブラジルのコラムに注目すると、以下の記述がみられた¹⁷⁾。

1908 (明治41) 年、笠戸丸が、781人の日本人移住者を乗せて、初めてブラジルへ向かいまし

た。その後、1924年に、アメリカで日本からの移民を禁止する法律が成立すると、ブラジルへ移住する人々はいっそう増えていきました。最初は、ほとんどの人々がコーヒー農園で働きましたが、しだいに、土地を自力で開拓したり、農業以外の仕事で成功したりする人々も出るようになっていきました。

こうして、海外へ移住した人々は、慣れない気候や文化の中で苦労を重ねながら、家族や仲間と力を合わせて働き、現地の社会に貢献するようになっていったのです。

そして、「土地を開拓する移住者たち」という説明にて、原野を開拓する日本人移民の写真が1つ提示されていた。つまり、明治41年の第1回ブラジル移民では笠戸丸という輸送船で781人渡航したこと、大正13（1924）年のアメリカ合衆国での排日移民法制定の影響もあり近代後期にブラジルへの日本人移民の比重が大きくなったことをはじめ、ブラジルの箇所での日本人移民や日系人の記述より詳細な歴史的背景が記されていた。

一方、ハワイのコラムに注目すると、以下の記述がみられた¹⁸⁾。

はなやかな色やがらのアロハシャツは、ハワイの代表的な衣服です。実は、このシャツのデザインは、日本から移住した人々と関係があるのです。

19世紀後半、多くの日本人が、サトウキビ農園で労働者として働く契約で、ハワイに移住しました。当時、農園の労働者が着ていた作業着は、パラカとよばれる青いチェックがらのシャツでした。このがらは、日本にとってなじみのふかい紺によく似ていたこともあり、日本から移住した人々もこのシャツを愛用しました。また、日本から持っていった着物も大切に使い、パラカシャツに仕立て直し着たりしました。この、着物を仕立て直したシャツは、独特の色やがらで、新鮮で魅力あるものとして現地の人々に受け入れられ、その後も、日本ふうのがらのシャツがつくられるようになったのです。

また、「サトウキビ農園で働く人々」という説明

で甘蔗の前にパラカシャツを着た女性が集合した写真と、「日本の影響がみられるアロハシャツ」という説明で和柄のアロハシャツの写真が提示されていた。つまり、ハワイの記述では、19世紀後半から甘蔗労働の契約移民として移住したといった日本人移民および日系人の歴史を概観するというより、アロハシャツという文化に注目し、紺との類似性による彼らの愛着や、着物の仕立て直しによる模倣をはじめ、日本人移民がハワイの文化変容に関わったことを理解させる内容となっている。

小学校の学習段階では、日本人移民や日系人の動向について詳細に理解するというよりは、序論で提示した授業開発をはじめ、文化変容や日系人への聞き取り調査を通じて、まずは彼らの存在に興味関心をもたせることが重要である¹⁹⁾。ただし、日系人への聞き取り調査は、証言資料を用いることもできるが、直接面会できたほうがより児童に強い興味関心を喚起することができると考えられる。しかし、調査対象者の選定が困難であり、実現可能性が高いとはいえない。また、東京書籍のように、日本人移民や日系人に関わる資料館を訪問するという対応も有効と考えられるが、日本人移民や日系人を専門に扱った資料館は日本では主に海外移住資料館と海外移住と文化の交流センター（兵庫県神戸市、日本ハワイ移民資料館（山口県周防大島町）の3か所であり、移民展示や移民資料を含む資料館も沖縄県の公立資料館の一部をはじめ全国に少数しか存在しない²⁰⁾。このような状況を勘案すると、教育出版のアロハシャツや東京書籍の日本料理とブラジル料理が併存した日本人移民農家の食卓の題材をはじめ、日本人移民や日系人と関わる文化変容を通じて日本と関わりの深い国を理解するという志向は、教材の準備や問題解決学習の実践、日本人移民や日系人に対する児童の興味関心の喚起のしやすさをはじめ、より有効であると指摘できる。また、教育出版では、日本の歴史と日本と関わりの深い国、国際理解という、歴史と地理、公民の3領域に日本人移民や日系人に関わる内容を展開させており、領域を横断した学習を促進している点でも注目できる。

表2 沖縄県の主な小学校社会科副読本にみる日本人移民や日系人の記載箇所

自治体	移民編 刊行 年次	副読本 刊行 年次	3年次	4年次			主な内容・備考
			身近な地域 や市の地形、 土地利用、 公共施設な どの様子	地域の 人々の生活	地域の発展 に尽くした 先人の具体 的事例	県内の特色 ある地域	
沖縄県	1974	2009	×	×	△	×	当山久三
名護市	2008	2011	×	○	×	×	羽地大川の水害と移民送出
宜野座村	1991	1997	×	△	×	×	当山久三がハワイ移民送出 移民の町・雄飛の里、当山久三の移 民送出と地域振興、大城孝蔵の移 民送出とダバオ開発
金武町	1996	2007	○	○	○	×	※移民編は具志川市史として刊行
うるま市	2002	2006	×	×	×	×	
嘉手納町	2003	2009	×	×	×	×	
北中城村	2001	2011	×	×	×	×	
南風原町	2006	2015	×	△	×	×	戦後アルゼンチン呼寄移民、ハワ イから獅子寄贈、ボリビア移民、 ※教員向け資料
与那原町	2006	2012	×	×	×	○	世界のウチナーンチュ大会

注) 項目は学習指導要領の表現を用いた。「○」は本文中に記載有、「△」は図表や年表にわずかに記載、「×」は記載なしを示す。

資料: 各副読本をもとに作成。

Ⅲ. 沖縄県の小学校社会科副読本にみる日本人移民や日系人の記述

(1) 記載箇所

沖縄県における小学校第3学年や第4学年の社会科副読本は、沖縄県および各市町村で刊行されている。本章では、平成20年の小学校学習指導要領改訂以後に刊行され、かつ日本人移民や日系人に関する記述の含まれる可能性の高さを勘案し、自治体誌移民編の刊行後に作成された副読本9冊と沖縄県の副読本1冊に注目し検討する²¹⁾。

まず、日本人移民や日系人の記載箇所に注目したい。表2より、沖縄県からの海外移民送出の先覚者である当山久三²²⁾や大城孝蔵の出身地である金武町にて、とくに多くの記載がみられた。第3学年の「身近な地域」にて「移民の町・雄飛の里」というみだしにて当山や大城が顕彰されていることが紹介されており、第4学年の「地域の人々の生活」のうち地域の歴史の内容や「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」では「町をひらく」に「金武町の発てんと当山久三」、「フィリピン移

民の父 大城孝蔵」というみだしが立てられ、当山久三や大城孝蔵の事績が多く記されていた。また、名護市では、「地域の人々の生活」のうち地域の歴史の内容にて、羽地大川の改修を扱った「羽地ターブックと羽地大川」に、明治期における水害と海外移民送出との関わりについて記されていた。

しかし、金武町と名護市以外の沖縄県および他の市町村については、ほとんど記載がみられなかった。沖縄県では、第4学年の「地いきの発てんにつくした人たち」に当山久三の写真と氏名が提示されるのみであり、具体的な事績については記されていない。宜野座村では、明治32(1899)年に当山久三が沖縄県から初めてハワイ移民を送出したことが年表に記載されるのみであった。南風原町では、第二次世界大戦後の昭和25(1950)年のアルゼンチン呼寄移民とハワイから南風原町宮平地区へ獅子の寄贈、昭和29(1954)年のボリビア移民について、副読本の巻末にある教員向け資料としての年表に記載されていた。うるま市や嘉手納町、北中城村については、記載が皆無であ

った。

一方、与那原町では、与那原町域を扱った箇所ではなく、第4学年の沖縄県に関する内容のうち、「空のげんかん那覇国際空港」という沖縄県と他の都道府県や海外との関わりを学習する箇所に、「外国とのかかわり」というみだしが立てられ、世界のウチナーンチュ大会について記されていた。そして、「移民」の定義の説明や、通訳ボランティアを務めた「よしきさんのおばさんの話」として世界のウチナーンチュ大会の意義や、児童の発問として参加者の居住地や移住の経緯等が記されていた。世界のウチナーンチュ大会は、移民多出府県である沖縄県を特徴づけるイベントの1つであるが、他の市町村や沖縄県の副読本にてほぼ言及されておらず、与那原町の副読本は希少な事例となっている。

(2) 記述内容—金武町と名護市を中心に—

次に、日本人移民や日系人の記述内容について、多くの記載がみられた金武町と名護市の副読本に注目し検討する。金武町では、とくに第4学年の「地域の人々の生活」や「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」に関わり、「金武町の発てんと當山久三」、「フィリピン移民の父 大城孝蔵」というみだしにて当山久三や大城孝蔵の事績が扱われていた。なお、金武町の副読本は、表2で示した副読本のうち、唯一自治体誌移民編の内容が明確に参照されていた²³⁾。まず、当山久三について、多数の頁にわたるため、章立てを示すと以下の通りであった²⁴⁾。

金武町の発てんと當山久三

當山久三記念ひの見学
當山久三の生いたちと仕事
億首川の流れの変こう
金武小学校のしき地の決定
久三の考え

久三と移民

当時の金武の人たちの暮らしと願い
移民した人たちの暮らし
移民後の金武の様子

「金武町の発てんと當山久三」や「當山久三記

念ひの見学」では記念碑の見学を通じて問題意識を確認し、「當山久三の生いたちと仕事」で当山急増の経歴を概観した上で、「億首川の流れの変こう」では現・金武町域での排水工事と農地拡大「金武小学校のしき地の決定」は御願所への小学校の建設、「久三の考え」は迷信打破や習俗改良といった、当山久三のさまざまな事績が記されていた。また、「久三と移民」で沖縄県から海外への移民を概観した上で、「当時の金武の人たちの暮らしと願い」は生活困窮が出移民の要因の1つとなったこと、「移民した人たちの暮らし」はハワイへ移住後も甘蔗栽培等の農業や言語、他府県出身者からの差別で苦労したこと、「移民後の金武の様子」は送金による生活改善や後続移民の送出といった点が記されていた。

つまり、当山久三の事績について、海外移民送出に限らず、農業振興や教育、生活改良をはじめ、多面的に記されていた。一方、当山久三は海外移民送出における渡航費の不正徴収や、その資金が一部活用され後年衆議院議員となったこと等、地域振興への貢献だけでなく自身の利害追及というさまざまな側面がみられたが²⁵⁾、副読本では地域振興以外の側面についてほぼ言及されていなかった。また、移民の動向について、出移民の要因については生活困窮にのみ言及され、移住後は労働や言語、差別で苦労しながら、送金により出身地の生活改善が図られ、先の成功例をめざし後続移民が送出されるという、主に経済的側面に注目し記されていた。一方、出移民の要因は経済的側面だけでなく、明治中期の地割制の廃止に伴う私有財産の成立と、それを維持するため本家や長男優先の形成による非後継者や分家からの移民送出や、私有財産の売却による渡航費捻出の可能となったこと等、社会的側面もみられた²⁶⁾。しかし、あくまで小学校第3学年や第4学年という学習段階を勘案すると、海外移民送出には地元有力者というキーパーソンが存在することや、出移民の要因の1つに経済的側面があるということが確認され、海外移民送出の歴史やキーパーソンの役割を概観した内容といえる。

次に、大城孝蔵について、こちらも多数の頁にわたるため、章立てを示すと以下の通りであった²⁷⁾。

フィリピン移民の父 大城孝蔵
 少年時代
 ベンケット移民へ
 ダバオへの移民
 ハゴタン（動力麻ひき機）の考案
 日本人小学校をつくる
 移民人生に幕を閉じる

「フィリピン移民の父 大城孝蔵」では大城孝蔵の経歴を概観した上で、「少年時代」では富裕層の出身であり高学歴であること、「ベンケット移民へ」は当山久三の斡旋でフィリピンのルソン島へ渡航し道路工事の監督となったこと、「ダバオへの移民」はミンダナオ島へ転住し麻栽培への従事と日本人初の農事会社の設立、「ハゴタン（動力麻ひき機）の考案」は麻ひきの機械化、「日本人小学校をつくる」は日本人小学校設立への貢献、「移民人生に幕を閉じる」は死後の顕彰について記されていた。つまり、大城孝蔵については、金武町域における事績というより、教育に加えとくに農業振興という経済的側面に注目しながら、移住先の日系人社会への貢献を重視した内容となっていた。ただし、大城孝蔵は富裕層の出身や高学歴であることにも言及しており、出移民と階層との関わりといった社会的側面への注目もみられた。

続いて、名護市の副読本では、「羽地ターブックと羽地大川」に、「工事にたずさわったおじいさんの話」として、以下の記述がみられた²⁸⁾。

大川が2度目の大こう水をおこしたのは、明治43年わたしが7才の頃でした。(中略) こう水の後、田井等、親川、川上の土地は、長い間使えず、土砂や土石にうもれたままでした。大地主は、はんらんがあつてこまることはありませんでしたが、土地をかりて農業をしていた人々は、生活に大変こまっていました。そこで紡績工場や炭坑へ出かせぎに行ったり、遠くハワイやブラジルへ移民したりした人たちもいました。

この記述では、明治43（1910）年の水害による農地の被害が、国内出稼ぎや海外移民の要因になったのみ記している。しかし、現・名護市羽地地区からの海外移民送出は、明治中期より富裕層

をはじめ少数みられ、明治37（1904）年よりすでに本格化していた。また、出移民の要因は、水害による農地被害という経済的側面だけでなく、金武町の副読本の検討で指摘したように、地割制廃止を契機とした社会的側面をはじめ多面的要因がみられたが²⁹⁾、この点への言及はみられなかった。つまり、金武町や名護市の副読本ともに、日本人移民や日系人を、地域の偉人の事績の紹介や地域の発展史の一環として扱われるため、産業振興といった経済的側面の比重が大きくなり、キーパーソンについては地域への貢献以外の多面的な側面に言及されにくくなっていた。

(3) 記述の課題—与那原町にも注目して—

与那原町では、沖縄県の他の副読本とは異なり、第4学年の沖縄県と他の都道府県や海外との関わりを学習する箇所、「外国とのかかわり」というみだしにて、沖縄県の副読本で唯一世界のウチナーンチュ大会が扱われていた³⁰⁾。

まず、世界のウチナーンチュ大会の写真が提示され、「これは、世界のウチナーンチュ大会の前夜祭パレードだよ」や「はたをふって行進しているよ。どこの国の人かな」、「じゃあ、この人たちは沖縄から外国へ移り住んだ人なの?」、「ぼくのおばさんもウチナーンチュ大会で通訳ボランティアをしたそうだよ」という児童の会話が記されていた。そして、「よしきさんのおばさんの話」として、以下の記述がみられた。

通訳ボランティアとして、空港で海外から来たウチナーンチュ達を迎えました。私たちの住む与那原町からもたくさんの方が移民として海外で活躍しています。印象に残っているのは、何十年ぶりの再会ででき合う人たちや、生まれて初めて沖縄を訪れる人たちのうれしそうな笑顔です。顔立ちは沖縄の人ですが、各国の言葉を話すウチナーンチュたちを見ると、小さな島から世界がみえてくるようでした。

さらに、語彙の説明として、「世界のウチナーンチュ大会」とは「世界各地で活躍する沖縄県出身者の交流を深めるため、5～6年に1度行われています。約30の国や地域から4000人をこえる人々が

集まり、会議や交流祭が行われました」、「移民」とは「労働して生計を立てる目的で他国へ移り住むこと。今では1世から6世までその数は36万人に広がり、多くの人が海外で活躍しています」と記されていた。

沖縄県と他地域との関わりに注目する際、沖縄県の副読本をはじめ、交通や物流を扱ったものが多い³¹⁾。しかし、与那原町では、世界のウチナンチュ大会という人や文化の交流に注目しており興味深い。また、児童の会話にて、世界のウチナンチュ大会の概要や、参加者の属性について議論された上で、児童の親族が「小さな島から世界がみえてくる」と発言し、沖縄県と世界との交流を意識づけている。もちろん、世界のウチナンチュ大会は、近代以前より母国で少数の言語や文化をもつ集団と認識され、近代以降も琉球処分や地上戦、米軍統治という母国からの被差別体験を受けてきたという歴史的背景や、現代においても自己決定権の獲得がめざされるといった時代状況、1990年代の西銘知事による国際交流の促進といった行政の対応等が関わり、在外同胞との紐帯の確立をめざすという複雑な経緯をはらんだ特異なイベントとして位置づけられる³²⁾。与那原町の副読本においては、このような世界のウチナンチュ大会じたいをめぐる説明がほとんど記されていない。しかし、小学校第3学年や第4学年という学習段階を考慮すると、世界のウチナンチュ大会を通じた現代の沖縄県の歴史や行政、社会の状況の理解というより、世界のウチナンチュ大会という沖縄県特有の文化的事象を通じて他地域とをつなぐ日本人移民や日系人の存在をまずは確認するという点において、与那原町の副読本の取り組みに意義をみいだせる。

IV. 結論

本稿では、小学校社会科教科書や沖縄県小学校社会科副読本における日本人移民や日系人の記述を検討し、今後の小学校社会科において日本人移民や日系人を題材として活用しうるための論点を整理しようと試みた。まず、小学校社会科教科書では、第6学年で日本人移民や日系人が主に記載されていた。そして、ハワイのアロハシャツやブ

ラジルの日本料理とブラジル料理の併存した食卓を通じた問題解決学習といった文化的側面へ注目することで教材として有効であることや、教育出版のように歴史と地理、公民の領域を横断した展開も有効であることがみいだされた。次に、沖縄県の小学校第3学年や第4学年の社会科副読本では、沖縄県は海外移民を多く送出しながら、副読本には日本人移民や日系人の記載は少なかった。また、一定程度以上の記載のみられた金武町と名護市、与那原町の副読本を中心に記述を検討したところ、あくまで地域の偉人や地域の発展史の一環として移民を扱うため、キーパーソンの産業振興での貢献や農地被害と出移民との関わりをはじめ海外移民送出の経済的側面に注目される傾向がみいだされた。そして、与那原町のように、世界のウチナンチュ大会を通じて沖縄県と他地域との関わりを検討するといった、文化的側面に注目した問題解決学習の導入が、沖縄県の地域学習にとって有効となる可能性がみいだせた。

本稿は、あくまで小学校社会科教科書と沖縄県小学校社会科副読本における、日本人移民や日系人の記述の確認と論点整理にとどまっている。このため、小学校社会科における日本人移民や日系人は、本稿で注目した「我が国とつながりの深い国の人々の生活の様子」のブラジル地誌学習や、沖縄県の地域学習にとどまらず、多文化教育の題材として活用すべきであるが、本稿では十分検討できなかった。沖縄県においても、近代には日本有数の海外移民送出地域であったが、2010年代半ば以降語学習得や労働目的でネパール人移民が急増しており³³⁾、今後は外国人労働者の受入れをはじめ多文化教育の重要性が高まると推察される。今後の課題として、沖縄県の地域特性に応じた多文化教育のあり方について、より詳細な検討が必要である。

注

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館、2008、1-9頁。
- 2) 石川寛輔「社会科教科書における日本人移民・日系人に関する記述の変遷—グローバル時代の移民教材に向けて—」(森茂岳雄・中山京子編『日系移民学習の理論と実践—グローバル教育と多文化教育

- をつなぐー』明石書店, 2008), 55-67頁。
- 3) ①居城勝彦「Let's 盆ダンスー踊ることをとおして学ぶ日系文化のハイブリット化ー」(森茂岳雄・中山京子編『日系移民学習の理論と実践ーグローバル教育と多文化教育をつなぐー』明石書店, 2008), 72-87頁。原典は、以下のものである。②居城勝彦「LET'S 盆ダンスー異文化理解の学習過程を通して自分たちの文化に気づくー」藤棚(東京芸芸大学) 39, 2007, 28-31頁。なお、授業開発ではないが、中山は、日本人移民や日系人に関わる文化変容の題材の提供として、ロコ・モコをはじめハワイにおける日系人と食文化との関わりを紹介している。③中山京子「ハワイ日系人が生み出したメニュー」(森茂岳雄・中山京子編『日系移民学習の理論と実践ーグローバル教育と多文化教育をつなぐー』明石書店, 2008), 102頁。
- 4) 居城勝彦「ハワイで暮らす日系人から見た第二次世界大戦」(森茂岳雄・中山京子編『日系移民学習の理論と実践ーグローバル教育と多文化教育をつなぐー』明石書店, 2008), 89-93頁。ただし、平成29年度現在の小学校社会科教科書において、日本人移民や日系人は居城の扱ったハワイの事例ではなく、日本とつながりの深い国の単元の、ブラジルの事例で扱われることが主である。
- 5) ①中山京子「多文化教育の知の導入による小学校社会科学習内容の再構築ー単元「海を渡る日系移民」の開発を事例としてー」社会科研究65, 2006, 31-40頁。②太田 満「日系移民学習における自尊感情と文化理解の意義ー小学校3年「多文化社会に生きるわたしたち」の開発単元を通してー」国際理解教育20, 2014, 24-33頁。
- 6) 梅野正信・佐藤康子「小学校社会科副読本における歴史関係記述の考察」上越教育大学研究紀要36-1, 2016, 11-30頁。
- 7) 中城村教育委員会編・発行「中城の人も海外移民に行っているの?」(『ありんくりん中城(護佐丸コース副読本) うまり島にほこりをもって』, 2015), 30-31頁。
- 8) 花木宏直「中学校社会科地理的分野の教科書にみる日系人の記述の検討ー沖縄県系人との関わりに注目してー」琉球大学教育学部附属教育実践総合センター紀要24, 2017, 1-12頁。
- 9) 小学校社会科教科書および沖縄県小学校社会科副読本の内容のみだしの表記は、学習指導要領解説の表現に準じた。前掲1), 16-17頁。
- 10) 本稿で扱った教科書は以下の通りである。①有田和正・石 弘光『小学社会 6上』教育出版, 2012。②有田和正・石 弘光『小学社会 6下』教育出版, 2012。③清水毅四郎ほか『小学社会 6年上』日本文教出版, 2013。④清水毅四郎ほか『小学社会 6年下』日本文教出版, 2012。⑤北 俊夫・佐藤 学・吉田伸之ほか『新しい社会 6上』東京書籍, 2012。⑥北 俊夫・佐藤 学・吉田伸之ほか『新しい社会 6下』東京書籍, 2012。
- 11) 前掲10) ②, 48-49頁。
- 12) 前掲10) ④, 50-52頁。
- 13) 前掲10) ⑥, 60頁。
- 14) 前掲10) ②, 63頁。
- 15) たとえば、人文地理学では、1990年代から2000年代前半にかけて、日系人労働者の生活や就労の実態の検討が蓄積されており、その一環として移住の経緯も明らかにされてきた。①片岡博美「浜松市におけるエスニック・ビジネスの成立・展開と地域社会」経済地理学年報50-1, 2004, 1-25頁。②島田由香里「横浜市鶴見区における日系人の就業構造とエスニック・ネットワークの展開」経済地理学年報4603, 2000, 266-280頁。③吉田道代「近年の大都市周辺地域における外国人労働者雇用の展開と実態ー岐阜県可茂地域の製造業を事例としてー」経済地理学年報38-4, 1992, 303-317頁。
- 16) 近年では、以下の論考がある。①佐久間孝正『多国籍化する日本の学校 教育グローバル化の衝撃』勁草書房, 2015。②宮島 喬『外国人の子どもの教育 就学の現状と教育を受ける権利』東京大学出版会, 2014。著者も、琉球大学教育学部開講の「地理学実習(人文地理)」を活用して、学生9人とともに平成29(2017)年2月に群馬県大泉町の日系人をはじめ外国人の子弟を対象とした学童施設を訪問し、おおよそ本文に記した問題がみられることを確認した。
- 17) 前掲10) ①, 115頁。
- 18) 前掲10) ①, 115頁。
- 19) ①前掲3) ①。②前掲4)。
- 20) 海外移住資料館ホームページより、「移住資料所蔵機関情報」を参照した。ただし、更新が平成26(2014)年で停止している。<http://www.jomm.jp/shozokikan/index.html>, 平成29年4月25日閲覧。
- 21) 本稿で扱った副読本は以下の通りである。①沖縄県小学校社会科教育研究会編『ひらけゆく沖縄県 みつめようわたしたちのきょう土』沖縄時事出版, 2009。②名護市教育委員会副読本編集委員会編『わたしたちの名護市 3・4年用』名護市教育委員会,

- 2011。③宜野座村教育委員会編・発行『わたしたちの宜野座 3年生 改訂版』,1997。④宜野座村教育委員会編・発行『わたしたちの宜野座 4年生 改訂版』,1997。⑤金武町教育委員会編・発行『わたしたちの金武町 3・4年生用社会副読本 改訂版』,2007。⑥うるま市教育委員会編『わたしたちのうるま市 3年』沖縄コロニー印刷,2006。⑦『わたしたちの嘉手納町』編集委員会編『改訂 わたしたちの嘉手納 3・4年』嘉手納町教育委員会,2009。⑧北中城村教育委員会編・発行『わたしたちの北中城村 3・4年』,2011。⑨南風原町社会科副読本編集委員会編『わたしたちの南風原町 3・4年用』南風原町教育委員会,2015。⑩与那原町社会科副読本編集委員会編『わたしたちの与那原町 3年・4年』与那原町教育委員会,2012。また,自治体誌移民編の刊行年次については,⑩沖縄県文化振興会史料編集室編『沖縄県史 各論編5 近代』沖縄県教育委員会,2011,466-468頁,を参照した。
- 22) 当山久三の表記について,本稿では基本的に「当山久三」と記し,副読本等を引用する場合は原典の表記に準じて「當山久三」と記した。
- 23) ①前掲21) ⑤,169頁にて,当山久三が東風平村(現・八重瀬町)出身の謝花 昇とともに自由民権運動で活動したことを述べた箇所,②金武町史編さん委員会編『金武町史 第1巻 移民・本編』金武町教育委員会,1996,542頁,から引用と明記される。
- 24) 前掲21) ⑤,168-184頁。
- 25) 湧川清栄『沖縄民権の挫折と展開—当山久三の思想と行動—』太平出版社,1972。
- 26) 名護市史や豊見城市史をはじめ,近年の自治体誌移民編では,出移民の要因の社会的側面に注目したものの比重が大きくなっている。①名護市史編さん委員会編『名護市史本編・5 出稼ぎと移民 I 総括編・地域編』名護市役所,2008。②豊見城市史編集委員会移民編専門部会編『豊見城市史第4巻 移民編(本論)』豊見城市教育委員会文化課,2016。
- 27) 前掲21) ⑤,185-191頁。
- 28) 前掲21) ②,151頁。
- 29) 前掲26) ①。
- 30) 前掲21) ⑩,187頁。
- 31) 前掲21) ①,80-83頁。
- 32) 金城宏幸「文化共有集団の越境的ネットワークに関する国際比較研究序説—バスク人とウチナーンチュの言語文化をめぐる社会空間の形成—」移民研究12,2016,81-98頁。
- 33) 沖縄県のネパール人移民の現状については,日本語学校での調査をもとにした以下の論考がみられる。①嘉手川隼「沖縄県内の日本語学校におけるネパール人学習者の現状と特徴について—A日本語学校の事例を中心に—」地域文化論叢(沖縄国際大学)17,2016,37-60頁。また,新聞記事についても,仲介業者の書類偽造や下宿での劣悪な生活環境,入国審査の厳格化に伴うネパール人在留認定者の減少等に言及したものがみられるが,日本語学校以外のネパール人の日常生活を捉えようとした以下のものが興味深い。②与那覇里子・大橋弘基「急増するネパール人 沖縄に来た理由(1)「日本は素晴らしい国」夢を追ひ勉強とバイトの日々」沖縄タイムスプラス,2016年8月6日付,<http://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/56207>。③与那覇里子・大橋弘基「6畳に2人で暮らす留学生たち 急増するネパール人 沖縄に来た理由(2)」沖縄タイムスプラス,2016年8月12日付,<http://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/57180>。いずれも平成29年4月25日閲覧。